

## 第69回定期演奏会

## PROGRAM

## グリンカ:歌劇「ルスランとリュドミラ」序曲 (約5分)

Mikhail Glinka: "Ruslan and Lyudmila" Overture

## ラフマニノフ:ピアノ協奏曲 第2番 八短調 op.18 ★ (約34分)

Sergei Rachmaninoff: Piano Concerto No. 2 in C minor, op. 18

第1楽章 モデラート Moderato

第2楽章 アダージョ・ソステヌート Adagio sostenuto

第3楽章 アレグロ・スケルツァンド Allegro scherzando

— 休憩 (20分) — Intermission

## チャイコフスキー:交響曲 第6番 口短調 op.74 「悲愴」 (約40分)

Pyotr Il'yich Tchaikovsky: Symphony No. 6 in B minor, op. 74, "Pathétique"

第1楽章 アダージョ - アレグロ・ノン・トロツポ Adagio - Allegro non troppo

第2楽章 アレグロ・コン・グラツィア Allegro con grazia

第3楽章 アレグロ・モルト・ヴィヴァーチェ Allegro molto vivace

第4楽章 フィナーレ:アダージョ・ラメントーソ Finale: Adagio lamentoso

指揮・芸術監督:佐渡 裕 Yutaka Sado, Conductor &amp; Artistic Director

ピ ア ノ:ドミトリー・メイボローダ Dmitry Mayboroda, Piano (★演奏曲)

管 弦 楽:兵庫芸術文化センター管弦楽団 Hyogo Performing Arts Center Orchestra

2014 4/11(金)・12(土)・13(日) 3:00PM開演  
兵庫県立芸術文化センター KOBELCO 大ホール

主催:兵庫県、兵庫県立芸術文化センター

※演奏時間は目安となります。前後する可能性がありますので予めご了承ください。

## 3分ですぐわかる 今回の聴きどころ

## 3人の作曲家が時代を超えて引き継いだ、情緒豊かなロシアの魂に触れる

油断していると心の底まで魅了されてしまう美しいメロディ、人生を教えてくれるかのようなドラマ、そして大地に根ざしているのかと思うほど腰の据わったパワー。19世紀の中盤に台頭してきたロシアの音楽は、それまでのクラシック音楽史における勢力図を塗り替えてしまうほどの存在感を放っています。そのリーダーとなったのがグリンカ、そして今なおロシア音楽の代表格であるチャイコフスキー、そのロマンを20世紀へと伝えたラフマニノフ。3人は師弟関係にこそないものの後輩作曲家に影響を与え、ロシア魂をリレーしていったランナーだったのです。その共通点は?個性は?私たちが惹きつける魅力は?本日は豊かな響きの海に、遠慮なく浸ってください。

## ホールを揺るがす絶対無二の圧倒感、佐渡&amp;PACならではの深いサウンド

気宇壮大な3つの作品が並ぶコンサートは、マエストロ佐渡の雄大な音楽作りが最高の形で味わえるプログラム。天空にまで響き渡るような歌、心を躍らせるリズム、聴き手の耳を驚つかみにするオーケストラのトゥッティなど、聴きどころはたっぷり。しかし表面上だけではなく、響きの向こうに広がる深い世界やひと筋縄ではいかないドラマ、作曲家の人生や哲学などを聴きとろうとするなら、その音楽はきっと応えてくれるでしょう。ソリストとして登場するドミトリー・メイボローダは、1993年生まれの新鋭ラフマニノフ弾き。作曲者も学んだモスクワ音楽院の伝統を継承しつつ、同世代も多いであろうPACのメンバーとフレッシュな音楽を聴かせてくれるはずです。

オヤマダアツシ(音楽ライター)

 **ここだけは絶対チェックしておきたい!ライターおすすめ『必聴ポイント』**  
check

歌!また歌!帰り道で思わず歌ってしまいそうなほどキャッチーなメロディが、次々と聞こえてくるロシアの音楽。心ゆくまで味わい、ぜひ自分のものにしてください。

## PROGRAM NOTE

曲目解説 — 演奏をより深く楽しむために オヤマダアツシ(音楽ライター)

## グリンカ: 歌劇「ルスランとリュドミラ」序曲

(1804-1857) 初演: 1842年 サンクトペテルブルク

### 近代ロシア音楽のパイオニアによる、本格的オペラ宣言

J.S.バッハが「音楽の父」だとするなら、「ロシア音楽の父」となるのは間違いなくミハイル・グリンカだろう。ロシア音楽史の中で現在の私たちが知る作曲家が登場するのは、19世紀の中盤。つまりバロック音楽の時代やモーツァルト、ベートーヴェンらが生きた古典派音楽の時代には、目立った作曲家が見当たらない。バレエは早くから教育システムが取り入れられていたものの、ロシア固有の音楽・文学・演劇などが息づいたのは19世紀以降なのである。

グリンカが「父」と呼ばれるのは、オーケストラ作品や室内楽、数多くのピアノ曲、そしてオペラや歌曲、宗教音楽まで幅広いジャンルに作品を残し、さらには後継者となる世代をしっかりと教育したからだ。ロシアの伝説や民話などをベースに本格的なオペラを作ったのも彼であり、1842年に初演された『ルスランとリュドミラ』は代表作のひとつである。2人の主人公名をタイトルにしたこのオペラは、魔法使いに新妻のリュドミラをさらわれた騎士ルスランが、いろいろな問題を解決して彼女を取り戻すという冒険物語(まるで現代の人気ゲームそのもの!)。オペラが始まる前に演奏される序曲は、冒険への序章とも言える躍動的な音楽であり、本日のようにオーケストラ・コンサートのオープニングを飾ることも多い。

曲はオペラのフィナーレを飾る婚礼の音楽に始まり、劇中で歌われるメロディなどを加えながら進んでいく。

### 楽器編成

フルート2、オーボエ2、クラリネット2、バスーン2、コントラバスーン、ホルン4、トランペット2、トロンボーン2、バス・トロンボーン、ティンパニ、弦楽5部

## ラフマニノフ: ピアノ協奏曲 第2番 ハ短調 op.18

(1873-1943) 初演: 1901年 モスクワ

### ロシアン・ロマンの宝石とも言える美意識がホールを満たす

20世紀を前にして、ロシア音楽の巨星となったチャイコフスキーが天へと召され、彼の薫陶を受けていたセルгей・ラフマニノフは精神的な支えを失ってしまう。類い希な演奏テクニックをもつピアニストとして将来が約束され、作曲家としても新しいロシア音楽のリーダーとなるべく活動していた彼だったが、交響曲第1番の初演(1897年)が失敗したことから自信を喪失していた。精神的に落ち込んだ彼は作曲活動から離れ、オペラ・カンパニーの指揮者となって約3年間を過ごしている。

その彼が再び新作の五線紙へと向かったのは、1900年の初頭。構想していたのはピアノ協奏曲であり、精神科医やチェーホフ(作家)ら友人たちによる励ましが功を奏して、早くも12月には第2・第3楽章のみをモスクワで初演している。評判は驚くほど良く、全曲の初演権を巡って争いが起きるほどだったというから、その人気うかがえるだろう。ラフマニノフ自身が素晴らしいピアニストであり、自らが演奏することも想定していたせいか(事実、初演は彼自身が弾いている)、ピアノ・パートは難易度が高い。しかしオーケストラが奏でる甘美なメロディや深みのあるハーモニーが相まって、ラフマニノフ節と呼んでもいいほどの個性が備わっている。

全曲は1901年10月にラフマニノフ自身のピアノ、従兄でピアニストとしても名高いアレクサンドル・ジロティの指揮により初演され、満場の喝采を浴びた。この作品で、ラフマニノフは作曲家としての活動再開を宣言したのである。



### 第1楽章 八短調 変則的なソナタ形式

ラフマニノフの作品におけるシンボルとなった「鐘」のモチーフで幕を開け、濃厚なロシアの魂を音楽にしたような第1主題がオーケストラで演奏される。第2主題はピアノが演奏する憧れに満ちたメロディ。

### 第2楽章 ホ長調 変則的な三部形式

穏やかで平和な雰囲気になった音楽。シンプルかつ繊細なタッチのソロ・ピアノも、ラフマニノフの美意識を伝えてくれる。

### 第3楽章 八短調 変則的なロンド形式

躍動感のある第1主題と、恋愛映画にも使われた第2主題とのコントラストが見事。第2主題が壮大な形となってフィナーレを飾る。

#### 楽器編成

独奏ピアノ、フルート2、オーボエ2、クラリネット2、バスーン2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン2、バス・トロンボーン、チューバ、ティンパニ、大太鼓、シンバル、弦楽5部

## チャイコフスキー：交響曲 第6番 口短調 op.74 「悲愴」

(1840-1893) 初演：1893年 サンクトペテルブルク

### 交響曲かレクイエムか、大河小説を思わせる崇高なドラマ

1893年10月16日(ロシア旧暦)、サンクトペテルブルクで行われたオーケストラ・コンサートの客席には、当時のロシア音楽界を代表する顔ぶれが集まっていた。リムスキー=コルサコフ、グラズノフ、そしてチャイコフスキーから次世代のホープとして期待されていたラフマニノフ、さらにはまだ少年だったストラヴィンスキーも父親に連れられて来ていたという。指揮台に立ったのはチャイコフスキーであり、新作の交響曲第6番「悲愴」が初演された。破天荒な構成と内容に当惑する人々もいたが、聴衆

の多くはロシアの交響曲史に残る傑作の誕生を心から祝福したのである。

まさか、その9日後にチャイコフスキーが卒然と天国へ召されることなど、誰一人として予想しなかっただろう。作曲時には懇意にしていた皇族とのやりとりで、第4楽章の空しさを詩人アプーフチン作の「レクイエム」に喩えたと伝えられるが、図らずもその交響曲自体が彼の墓標になってしまったのだ。本格的に作曲へ着手したのは52歳のとき(1893年2月)であり、深みのある力作であるにもかかわらず短期間で完成している。彼の中には明快なビジョンと完成図が出来上がっていたのだろう。作曲中には家族や知人へ「生涯で最高の傑作」「すべての魂をかけた作品」と伝えており、強い意気込みや自信が表れている。

### 第1楽章 口短調 序奏付きの変則的なソナタ形式

コントラバスとバスーンによる、つぶやきともうめきともとれるような序奏で幕を開け、テンポがやや速くなるとヴィオラが第1主題を演奏。第2主題はヴァイオリンなどによる夢見のようなメロディ。オーケストラが嵐のような叫びを発すると展開部が始まる。

### 第2楽章 二長調 変則的な三部形式

4分の5拍子という変則的なリズムでありながら、「白鳥の湖」などバレエ音楽に組み込まれていても違和感のない優雅な音楽。中間部では心臓の鼓動を思わせるティンパニの連打が響く。

### 第3楽章 卜長調 変則的なソナタ形式

パワフルな行進曲風のスケルツォ。

### 第4楽章 口短調 変則的な三部形式

チャイコフスキー自身が「レクイエム」の気分を示唆した、壮大なアダージョ。中ほどでは幸福な瞬間を回想するものの、慟哭と号泣を思わせるクライマックスを経て、すべては「無」へと帰っていく。

#### 楽器編成

フルート3(ピッコロ持替)、オーボエ2、クラリネット2、バスーン2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン2、バス・トロンボーン、チューバ、ティンパニ、大太鼓、シンバル、タムタム、弦楽5部